『福生町誌』編纂の足跡

木村東一郎

『福生町誌』が発刊されてからすでに二昔半の歳月が流れ去った。この委員会が発足してからだと三昔である。当時、私も三〇歳の中ばであったが、今は還暦を過ぎた歳になってしまった。福生町の郷土史の編纂が企画されたのは、町制施行二〇年を五年後に迎えるに当り、その記念事業の一環として、意義のあることを残すという発想からであった。当時、福生中学校の教諭であった私のもとに、時の大野教育長から相談がかけられた。その結果、先ず第一回の会合がもたれたのが、昭和三一年二月二〇日であった。町当局からは、森田町長、大野教育長、田村課長、高水課長が出席し、町内の公立学校からは、岡野校長、関根・木村教諭（福生中）、田村教諭（一小）、小野沢・坂上教諭（二小）が出席して各自抱負がのべられた。その頃、鮎沢信太郎（横浜市立大学教授・文学博士）先生という歴史学専攻の立派な方が町内に在住していたが、本書の編著・発行のすべてを町内公立学校に勤務する、社会科担当教諭に委ねるということが確認された。

ところが、学校の仕事が多忙なため何んの進展もないまま一年以上の時が過ぎてしまった。そんなことで、第二回委員会がもたれたのは、昭和三二年六月一四日のことであった。この時「福生誌覚書」の発行が決定した。つまり、この印刷物を定期的に町民に配布することによって、郷土史に関する認識・啓蒙と関係資料の発掘を町民に呼びかけるという考えであった。六月一九日原稿を〆切るという超速度の計画だったが、ともかく「福生誌覚書」第一号、四千五百部の発行をみた。それまで、停滞していた委員会活動も細々ながら始まり、一一月三〇日には町内在住の古老の話を聞く会を福生珠算学校で開催、一一名の出席者であったが、期待する成果が得られなかったという反省がなされた。いっぽう、寺社の調査や近世文書の調査なども計画したが思うように捗らなかった。

年も明けた昭和三三年二月一三日、第六回の委員会を開催、それまで、郷土誌編纂の仕事は産業課の下で進められていたものが、今後は教育委員会の下で行われることになった。この時、舘校長、羽村教諭（三小）が委員に追加された。調査のほうは、長者堀、丹塚、道塚など地名と現地の問題、隣接地の昭和、拝島、松原の関連資料の問題、森田家の文学資料等々、具体的に始まった。

ところで、教育委員会が所管することによって、木村、唐沢の両委員は郷土誌編纂の仕事の専任者として公に認られたが、学校ではクラス担任を持っていたので、実際の活動は制限された。教育委員会に移管されて第一回の委員会は、昭和三三年七月九日で、前から通算すると第七回の会合であった。この時は、町長、教育長も前任者と代り、町当局から、秋山町長、橋本教育長、浅見課長が出席、

学校側からは、岡野校長、関根・木村教諭（福生中）、宮沢・岩下・田村教諭（一小）、唐沢・小野沢・坂上教諭（二小）、舘校長、羽村教諭（三小）が出席、この席で正式に委員に委嘱され、委嘱状が手渡された。さらに、委員長・岡野、副・舘、常任委員・木村・唐沢の役員も決定した。ところが、其の後岡野校長が中学校を勇退すると同時に委員長の辞任という結果になって、結局、木村、唐沢の常任委員が実質的に、委員長、副委員長を兼ねて運営することになった。ともあれ、時の橋本教育長は、前福生中学校長であると同時に西多摩中学校長会長など教育界の要職を経て、教育長に就任した方で、しかも、福生町公立学校の命令権者の特権を発揮し、郷土誌編纂の仕事を至上命令的に号令し、その進展を催促した。その代り、予算措置も僅かではあったが計上され調査・研究の年度計画も緻密にたてられ、予定の期日の発刊を目標に実質的な行動が活発化した。そして、七月二二日には、長者堀の調査、続いて、福生の昔を知る人々の聞きとり調査なども実施し、また、執筆するに当っての見識を深めるため、小金井の郷土博物館の見学なども行った。この頃になると、文献の購入もできるようになり、「福生誌覚書」も第五号を出すまでに至った。その年の暮の一二月一三日には管外でということで飯能市まで出掛けて行って忘年会を開いたが、これも委員の親睦をはかることによって、一致協力して本の完成を願うという目的のものであった。

年も明けた昭和三四年二月一六日に第一〇回委員会を開催、「福生誌覚書」八号の執筆割当、調査の実施、執筆の段取りなどの意見が交換され、その結果、三月五日には当時郷土史研究家の第一人者として活躍していた稲村坦元先生（東京都教育委員会文化課）を講師に招き、町内の巡検を実施した。続いて三月七日に当時明大の大学院生だった煎本増夫氏に依頼して、熊川の内出家文書の整理、調査も行い、その結果「内出家文書目録」も印刷物にした。この年の一二月一四日には第一二回の委員会を開催、完成年度を迎えるに当っての決意を新たにした。この時、藤谷・高崎教諭（四小）が委員に追加された。「福生誌覚書」も一一号を発行する運びとなった。この年は木村、唐沢による常任委員会も毎週開催し、出版についての具体的問題が検討され、着実に準備がすすめられた。

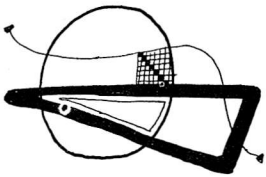
明けて四五年、ついに町誌発刊の年を迎えた。二月一〇日の常任委員会では、「福生誌覚書」一二号の検討、新年度予算、委員会の運営（事務的仕事は教育委員会で、委員は編集の仕事に専念する）、編集の内容（『福生町誌』の目次・執筆者の分担）など具体的問題が立案された。さらに六月二二日に第一三回の委員会が福生町役場で開催、続いて七月四日に常任委員会が開催され、写真を撮る場所の指定、分担執筆するに当って重複しない配慮、そのための調査資料の交換などが検討された。さらに続いて、七月四日に第一四回の委員会が福生中学校で開催、閉会後、鮎沢信太郎博士から郷土史編纂に関しての講演を聞いた。その要旨は次のようなものであった。○昭和の「新編武蔵風土記稿」作成のねらい。○町村に貢献した人々を書き残す。○歴史、地理、経済的に掘り下げた調査結果の記録、○福生の将来の展望。○資料を付録として掲載する。○図面をたくさん入れ、統計は図化する。○教科書的平板なものでなく、資料のあるものは思いきり書く等々が提言

された。

さて、この委員会を最後にして、夏休みを執筆の期間に利用し最後の追いこみにかかった。しかし、全員の原稿が出そろうまでにはかなりの時間を要し、一〇月一日の式典に間に合うかどうか、危ぶまれたが、あらゆる苦心の結果発刊することができた。出版社は、私がかつて拙著を二冊出したことのある神田の小川書店（桜書院）に依頼した。この時の町長は瀬古町長に代っていたが、「発刊のことば」の原稿執筆の依頼に町長室に行ったら、君にまかせるので、君書いてくれということで、教育長の「おわりのことば」と同時に、忙しい追い込みの時に私が書いてしまった。いずれにしても、三代の町長と、二代の教育長にわたる期間のなかで完成した『町誌』である。

＊　＊

当時、福生町の郷土誌編纂の企画、そして発刊は画期的なもので、近隣町村にさきがけたものであった。したがって、参考にする本も少なかった。私は、自分なりの試みとして、昭和三三年七月に『小曾木郷土誌』（B六版・一四八頁）と題した拙著を出した。戦前の皇国史観にもとづいた郷土史から脱皮した、戦後の新しい民衆を基礎にした郷土史観に立脚したものをという基本的な考え方であった。そんな次第で『福生町誌』も「史」でなく、「誌」にしたのは、それなりの理由からであった。その理由は、つまり、自然と人間そして時間と空間とが織り成す、地域の発展と構造を追究し、それを明確に記述するということにあった。たしかに観念的にはそれで良かったと思われたが、これを一冊の本に具体的に編むということは至難なことであった。したがって、結果は満足できるものではなかった。

ところで、『福生町誌』の発刊が節となってその後近隣町村でも郷土史の発刊が続いた。私も『定本市史・青梅』や『秋川市史』の執筆もしたが、何れもその地域に根ざしたユニークで、しかも年を重ねるごとにスマートな郷土史が誕生した。ところで、今また福生史の改訂版の企画ということは、郡内では画期的なことであると言えよう。それだけに、地域性に富んだ、しかも世界的視野にたったものが要求されるであろう。福生市の場合、戦前、戦後を通じて、軍事基地の集落という機能をもって村から町へ、そして市へと発展した。その歴史の流れのなかで実動した地域社会の生態を市史のなかに明確に位置ずけ、記述することが期待されるであろう。これこそ、他地域に追従を許さない、本地域独占の郷土史の内容として、注目に値するものであると考えるものである。

（きむら・とういちろう　長野大学教授・元『福生町誌』常任編集委員）